熱川温泉病院

症　例　概　要　患 者：70代　男性

病 名：両側横断的中足骨頭切断術後

既往歴：糖尿病、喫煙歴（ヘビースモーカー）

入 院 期 間：2024年12月～入院中

【入院までの経緯】

病前は車の運転を含めADLは自立。2024年4月に右踵に黒色壊死を伴う皮膚潰瘍が発生。前院に通院加療していたが、足趾～足底に壊疽が進行。8月に入院加療に切り替え、血漿交換療法を行った。9月末、右踵に全層植皮術、第3，4趾の腐骨除去を施行、10月中旬、両足横断的中足骨頭切断術を施行。経過不良にて翌月に再手術。創部が安定した為、リハビリテーション、経過観察目的にて当院回復期病棟に転院の運びとなる。

内　　容

本症例は、両側横断的中足骨頭切断術後に当院回復期病棟へ転院された70代男性である。入院直後に発熱があり、新型コロナウイルス感染が判明。喫煙歴の影響もあって肺炎が急速に進行し、重度の酸素化不良と意思疎通困難を伴う状況となった。声も出せず、ご家族は「もう数日で…」と覚悟を決めるほど重篤で、寝たきり状態の中で仙骨と右踵の褥瘡が悪化。仙骨部には黒色壊死が認められ、デブリードマンを要した。肺炎が落ち着き始めるとせん妄が強く出現し、「痛い」「お腹空いた」と昼夜問わず叫ぶなど精神的混乱も加わり、対応が困難な状態であった。入院より1か月ほどで、チームは患者さんとご家族との面談を重ね、「食べる楽しみ」を回復の軸とすることを共有し、介入を開始した。

セラピストと管理栄養士は、ご本人の「ラーメンが食べたい」「コーヒーが飲みたい」という希望を受け、嗜好や既往の食生活を詳細に聴取。言語聴覚士（ST）を中心に、とろみ付きコーヒーから段階的に嚥下評価を行い、やがて常食に移行した。栄養面と嗜好を両立させる形で、褥瘡治癒を意識したゼリー類、やわらかいせんべい、大好きだったタケノコの天ぷらなども取り入れられた。嚥下リスクの高い場面では、STや看護師が食事に同席し、評価と安全確保に努めた。

看護師・相談員は心理面の支援として、ご家族との面会を定期的に実施。療養病棟に入院中の妻とは、お互いの病棟看護師が連携をとっての調整により面会時間を共有することができた。3歳と1歳の

孫とは、写真やビデオ通話を通して交流が継続され、患者さんの笑顔を引き出す大きな支えとなった。リハビリの進行により離床時間が増加すると、せん妄症状も軽快し、患者さんは「これが食べたい」「孫に会いたい」と希望を口にするようになった。車椅子で食堂に移動し、食事を楽しむ姿が見られるようになった頃には、かつての穏やかな表情も戻りつつあった。

現在、入院より5か月が経過し、常食を安定して摂取できるまでに回復。体重も増加傾向にあり、褥瘡も治癒に向かっている。ご家族との面会は定期的に行われており、先日一足先に退院した妻との面会は、結婚40周年のお祝いを兼ねたものとなり、大好きなケーキを召し上がれて満足そうであった。糖尿病はあるものの、ご家族は「今は食べられるうちに好きなものを食べさせてあげたい」と穏やかな表情で語っている。

一時は命の危機にありながらも、「食べること」「家族と過ごすこと」という人としての根源的な欲求にチームが寄り添い、多職種で力を合わせた支援により日常が戻ってきた。この症例は、医療が単なる身体機能の回復だけでなく、人生の再構築を支える営みであることを改めて実感させた症例であると考える。